令和３年度 治療と仕事の両立支援セミナー
～レジリエンス（回復力）を生かした中小企業の取組～

中小企業の治療と仕事の両立支援・取組と課題

保健師からタクシー会社社長への転身

藤沢タクシー株式会社
根岸　茂登美

2022年１月27日

自己紹介

神奈川県藤沢市に生まれる
短大卒業後、看護師として病院等勤務
看護学校教員
30代　乳がん罹患
大学編入・卒業　保健師免許取得
大学院修士課程修了（老年看護学）
2001年　事業（家業）継承　三代目代表取締役に就任
大学院博士課程修了（産業保健）
看護学校・看護大学等非常勤講師兼務　　現在に至る

両立支援に関わるおもな役割：事業者、がんサバイバー、
看護師・保健師、衛生管理者、両立支援コーディネーター、
厚生労働者 国立研究開発法人審議会高度専門医療研究評価部会委員、
厚生労働省 がん対策推進協議会委員

会社概要

社名：　藤沢タクシー株式会社
事業の種類：一般乗用旅客自動車運送事業

車両保有台数：タクシー38台
社員数：80名（内・乗務員70名）

所在地：神奈川県藤沢市川名一丁目9番27号
電話 0120-13-1332 FAX 0466-24-2000
URL http://www.fujisawataxi.com

社是：典雅なる品位を育み、人格を高揚し、
以て社運隆盛のため社業に精励邁進する
社訓：正則の遵守　品位の確保
業務の完遂　安全運行の厳守
健康の保持

年　月	沿　　革
昭和15年11月	設立
昭和36年　7月	JR（旧国鉄）藤沢駅構内営業権取得
昭和60年　5月	藤沢市初福祉タクシー運行開始
平成13年　9月	代表取締役に根岸茂登美が就任
平成15年　2月	治療と仕事の両立支援の取組開始
平成15年　8月	地域初禁煙車両運行開始
平成27年10月	がん対策推進企業アクション推進パートナー企業登録
令和1年　２月	UD（ユニバーサルデザイン）タクシー運行
令和１年　４月	長期療養両立求人事業所登録

両立支援

＜両立支援の背景と概要＞

社員の高齢化（平均年齢：62歳）
有所見率の上昇（道路旅客運送業：75.2%）
高喫煙率（高喫煙率業種上位）
がん就労者・併存疾患をもつ者の増加・メンタル不調者

＜過去20年間で、がんと診断され、治療と仕事を両立した社員＞：19人
　うち、在職者８人．退職者６人．死亡者５人
＜年代＞：50代　5人．60代　10人．70代　４人
＜性別＞：男性＞女性
＜原発部位＞：消化器（胃・大腸・肝他）＞肺＞腎・泌尿器
＜おもな治療法＞：手術療法・化学療法・放射線療法
＜診断後の最長在職期間＞：9年９ケ月

取組(1)

＊写真使用・事例掲載については許可を得ています

事例紹介１）:N氏

1989,2　入社（妻・息子の３人家族）
2013,5　69歳 定期健康診断にて軽度貧血指摘.
　　9　下痢・下腹部痛出現.
　　10　下血し受診．精査、S状結腸がん、ステージⅣ、肝臓転移と診断・告知.
　　12　入院．開腹S状結腸切除術施行、CVポート留置
2014,1　復帰．化学療法（通院・点滴）開始.
　　9　再入院、肺転移、退院、復帰
2015,6　就労中止、入院、死亡　享年71歳

◆基本方針：両立を支援する、治療優先の環境づくり、
就労継続を保障する

◆支援内容：受診相談・両立支援プラン作成・職場復帰支援と対応（勤務形態変更・勤務時間短縮、時差出勤、通院配慮等）職場環境整備 、社会保障制度の利用促進（傷病手当・高額療養費等）、化学療法副作用の観察・対応（帽子着用や手袋装着許可、皮膚処置スペース確保等）、異常の早期発見、定期・不定期面談、就労継続保障、就労継続可否判断、勤務状況報告書作成、受診同行、就労中止決断、他

＜N氏に対する両立支援経過とN氏の思い、妻の思い＞

	診断期	手術期	化学療法期	終末期
状態	血液データの変化（貧血）、予兆自覚、症状出現（下痢・下腹部痛・下血）、受診、検査、診断（大腸がん・ステージⅣ・肝臓転移）	入院、開腹手術（S状結腸切除術）、CVポート留置、退院、在宅療養	職場復帰、化学療法開始（通院）、副作用出現（末梢神経障害・脱毛・発熱・口内炎・皮膚炎・嗄声・下痢等）、再入院、肺転移、退院	化学療法中止、病状進行、就労中止、 再入院、死亡
N氏の思い	がんかもしれない、どこで診察を受けるか・どこで治療するか、田舎へ帰って両親の墓参りがしたい、田舎へ帰るのはこれが最後かもしれない、 俺は絶対に負けない、働ける限り働きたい	主治医を信頼しよう、体力があるうちに早く治療を開始したい、 手術を終えたら早く復帰して、これ迄どおり働きたい、くたばってたまるか	がんは治す時代・がんは治る時代なんだ、くたばってたまるか、がんと闘ってがんで死ぬのは本望だ、仕事がしたくてたまらない、髪がザクッと抜けた時は一番ショックだった、肺転移を告げられた時のショックは大きかった、それでも俺は闘い続ける	抗がん剤が使えなくなったらもうおしまいだ、体がつらい、俺がいなくなったら、女房は生きていかれないと思ってたけど、案外、やれそうだな、 もう、いいだろう
妻の思い	夫は「俺は絶対負けない」っていつも口癖のように言っていた、夫は一切愚痴をこぼさなかった、一番覚えているのは「がんになってごめんね」っていう言葉、この先大変だねっていう意味だったと思う。本当は誰よりも本人が辛かったはずなのに	夫は病院も主治医も仕事の事も全て自分で決めた。夫は悔いはないはず、手術の前日に夫から「俺が死んだらどうする？俺が逝ったらすぐ来いよ」って言われ、私も本気で死ぬことを考えた	夫は仕事が生きがいだった、何が何でも生きるって言ってた、抗がん剤が始まって（夫は）喜んでいた、夫はがんと闘うだけの生活じゃ駄目だったと思う、会社を辞めさせられたら生きていかれない人だったと思う、だから私も精一杯夫を支えた、夫を送り出した後、涙があふれた	抗がん剤の中止は夫はすごくショックだった、夫は最期まで弱音を吐くような人じゃなかった、すごく強い人だった、夫は仕事が大好きだった、夫はひとりで悩んでひとりで最期を迎えたのかしら
両立支援	受診相談、情報提供、就労継続保障	社会保障制度利用促進（傷病手当・高額療養費 等）、治療優先の労働環境整備、就労継続保障	両立支援プラン作成、職場復帰判断及び支援、治療優先の労働環境整備、副作用・異常の早期発見・対応（帽子着用・手袋装着、皮膚処置スペース確保）、定期・不定期面談、就労継続判断、就労継続保障	受診同行調整、受診同行、主治医との面談、就労継続可否判断、就労中止決断

取組(2)

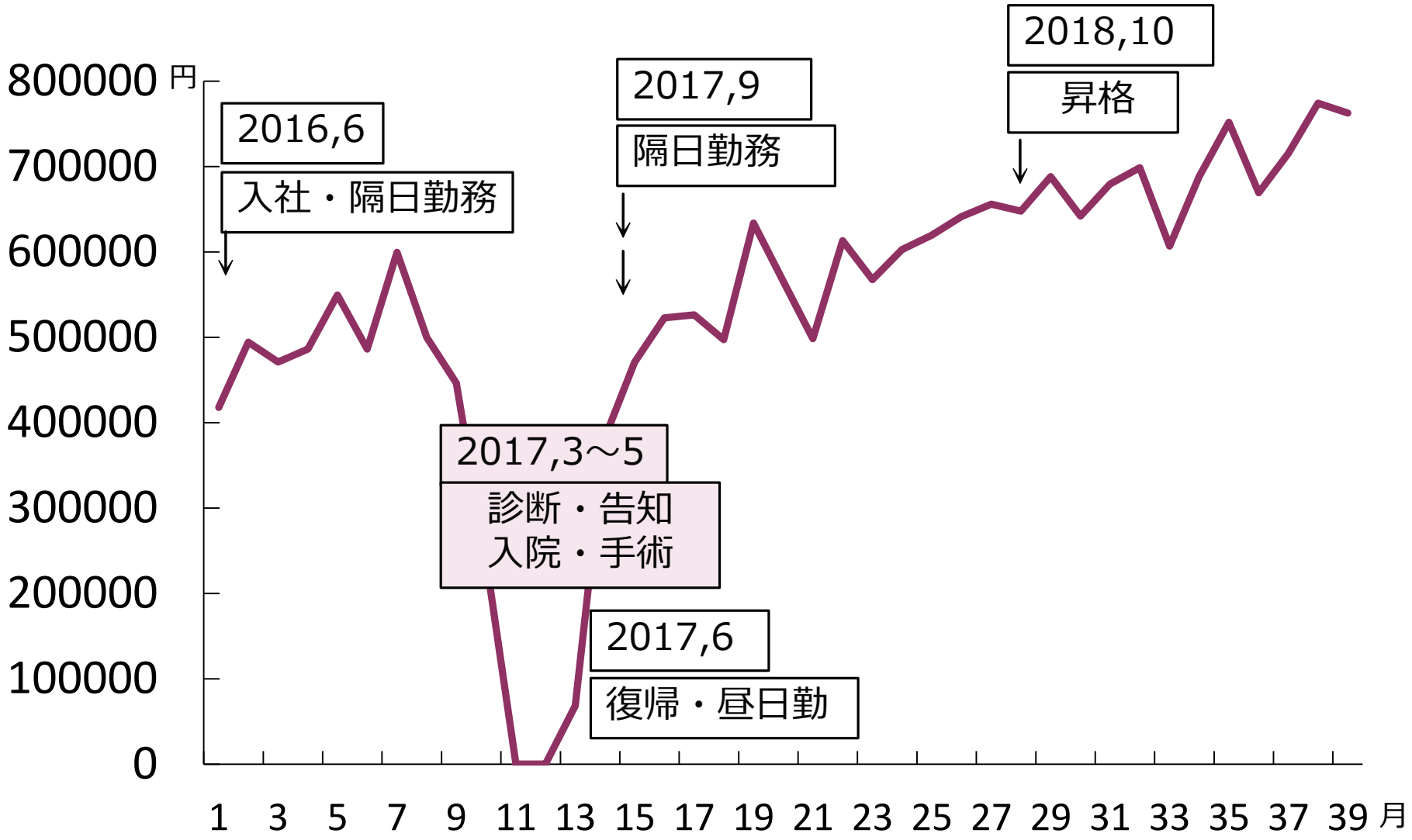
＊写真使用・事例掲載については
許可を得ています

事例紹介２）　：Y氏
2016,6 入社（妻・娘の３人家族）
2017,3 66歳 食欲低下・嘔気・嘔吐出現し受診.
精査の結果、胃がん・ステージⅣと診断・告知.
2017,4 入院. 腹膜播種、胃空腸バイパス術施行.
2017,6 復帰. 化学療法（通院・点滴）開始.
2018,4　化学療法（点滴）中止.
2019,10～ 抗がん剤服用しながらフル勤務

◆基本方針：両立を支援する、治療優先の環境づくり、
就労継続を保障する

◆支援内容：両立支援プラン作成・職場復帰支援プラン作成、勤務形態変更・勤務時間短縮、職場環境整備、化学療法・抗がん剤副作用の観察、異常の早期発見、情報共有、社会資源の活用（傷病手当・高額療養費等）、レジリエンス支援（術後の昇格＝後輩育成・指導、VIP業務 等）、他

＜Y氏の売上げの推移＞


800000 円
700000
600000
500000
400000
300000
200000
100000
0
2016,6
入社・隔日勤務
2017,3～5
診断・告知
入院・手術
2017,6
復帰・昼日勤
2017,9
隔日勤務
2018,10
昇格
1 3 5 7 9 11 13 15 17 19 21 23 25 27 29 31 33 35 37 39 月

取組の結果

＜両立支援によるメリット＞

企 業

風土の醸成
職場のヘルスリテラシー向上
社会的責任の貫徹
健康経営の実現
企業の繁栄・発展

労働者

業務の遂行・仕事の継続
収入確保、生活の安定、職位昇格
レジリエンス向上・体調安定
モチベーションの向上
ワークライフバランスの実現
働くことによる社会への貢献

事業者

人材確保・定着
生産性の維持・向上
健康経営
モチベーションの向上
利益の増加
事業の活性化・事業継続

今後の課題

＜中小企業における両立支援の推進＞

１）**中小企業の強み**を生かした両立支援
　・従業員の思いを事業者が**直接**聞ける
　・事業者の思いを従業員に**直接**伝えられる**（就労継続保障）**
２）企業における**家族への支援**を促進できないか
３）**がん検診**のすすめ
４）**企業と医療機関との連携**
５）**事業者を支える**仕組み

大切にしたい事

＜意思決定のプロセス＞

情報共有＝合意モデル

生物学的いのち
（biological life）

説明（身体機能の変化・検査データ）

医療スタッフや産業保健スタッフ

一般的判断

対話に基づく合意

患者や労働者・その家族

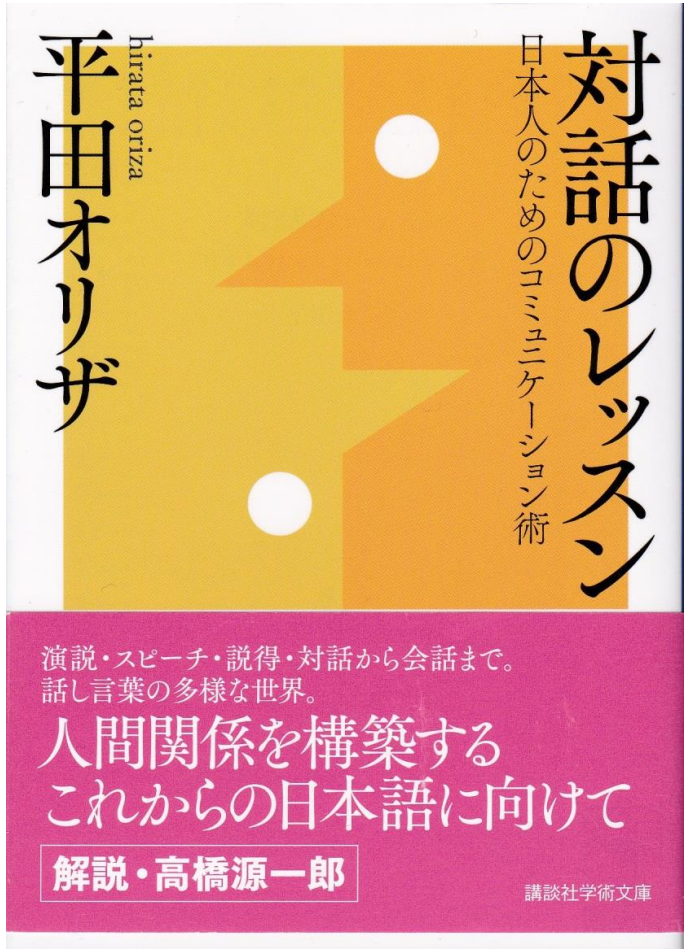
個別化した判断

説明（人生・生活・価値観・選好理由）

物語られるいのち
（biographical life）

清水哲郎・会田薫子「終末期ケアにおける意思決定プロセス（2012）より改変

＜両立支援における対話＞



平田オリザ(2015)：対話のレッスン－日本人のためのコミュニケーション術－，講談社学術文庫.

対話は「伝わらない」ということから始まる
対話の出発点はここにしかない
　私とあなたは違うということ
　私とあなたは違う言葉を話しているということ
　私は、あなたが分からないということ
　私が大事にしていることを、あなたも大事にしてくれているとは限らないということ
そして、それでも私たちは、理解し合える部分を少しずつ増やし、広げて、ひとつの社会のなかで生きていかなければならないということ　そしてさらに、そのことは決して苦痛なことではなく、差異のなかに喜びを見いだす方法も、きっとあるということ

平田オリザ：対話のレッスン－日本人のためのコミュニケーション術－，講談社学術文庫．　p.241より引用

ご清聴、有難うございました。

negishi@fujisawataxi.jp